

〈特別寄稿〉

アメリカにおける比較思想研究

——アメリカにおけるアジア哲学・比較哲学——

稲田 ケネース

比較思想学会 訳

この論稿は、昭和五十年十月十三日、在家仏教協会で、東方研究会・比較思想学会共催で開かれた講演会での講演（英語）の翻訳である。

私は「アメリカにおける比較思想研究」という本日のこのテーマについて皆様にお話できますことを、非常に光栄に存しております。この論題は私の胸につねに迫ってくる論題でございます。それは、太平洋の東岸と西岸の学者あるいは知識人たちに等しく非常に興味のあると考えられる問題でございます。そしてそれは熱心にまた真剣に注意して論ずべき問題でもあります。すなわち、もしも、将来、生命力ある文化が栄え、そして未来に影響を及ぼすことができるのであるならば、東西の関係というものは、単なる貿易とかあるいはビジネスの上での処理とか交渉以上にもっと深く進まねばなりません。単に物質的な交換だけに限られるべきではありません。その東西の関係というものは、お互いの思想の

中へもっと深く入っていかなくてはなりません。もっとも、こういうからといって、私は、物質的な、あるいは物質主義的なものを、非物質主義的なものからはっきり区別しなければならない、と言っているのではありません。そうではなくて、両者は手を携えて進みます——ちょうど哲学的な論議におけるように。われわれは、哲学的な論議においてつねに形式と内容というものを申ししますが、そのように手を携えて進まねばならないのであります。ただ今回は私はもっと包容的な視点で話そうとするのでございます。つきに例を挙げさせていただきます。

私がハワイにかつて住んでおりましたときに、ある日本の知識人に会ったのであります。その人はちょうどアメリカ合衆国を旅

行いたしまして、日本へ帰る途中だったのです。私はその日本人の知識人に尋ねました、「あなたはアメリカ哲学について何ものかを見出ししましたか。」そうすると、その方は、非常に面くらった顔付で、またこまったような顔をして、私をじっと見ておりました。そして最後にこう言ったのです。「アメリカはとてもとても大きいです。しかしアメリカ全体を見ても、アメリカ哲学のいかなる形も見出したり見つけたりすることはできませんでした。私にとっては、アメリカ哲学というものは途方もなく大きな高いビルディング、途方もなく大きな高速道路、それから非常に大きく広がっている畑だとか野原だとか、その間にとどころハンバーガーだのホットドッグのスタンドが点在している。まあアメリカ哲学というのはこういうものにすぎませんねえ。」その方はそうおっしゃいました。それはまことに結構な叙述であります。しかし、その叙述というものは非常に表面的で皮相浅薄であります。それはアメリカへ来る多くの訪問者の受ける印象であります。しかし、その印象というものはアメリカの生活様式の本性というものをおぼしめておりません。皆様は私に賛成してくださいと思いますが、日本だって途方もなく大きな高いビルディングはあるし、大きな高速道路もあるし、それからハンバーガーとホットドッグのスタンドもあるではありませんか。しかし、このような、目に見える、物質主義的なものの底には、そこに真の内容が潜んでいるのであります。それは精神であります。それはいたる

ところに動いている精神であります。

私たちはいま、アメリカの場面におけるアジア哲学ならびに比較哲学という論題に焦点をあてているのでありますから、われわれがアメリカ哲学と呼ぶところのものについてまずもって詳しい説明をすることをお許しください。じつさい、アメリカ哲学をあらわしている何か一つの要素といえますか、筋といえますか、あるいはその性格というものについて話すことは、実にむずかしいのです。アメリカの生活様式、アメリカの生き方というものは、決して明瞭でもないし、はっきりしているわけでもありません。しかしながら、そのアメリカの生活様式がどのような仕方であらうと、あるいはいかなるものであるとあろうとも、そこには、あそここれこそアメリカの生き方だとわれわれが感ずるような性格があるのであります。私がさきほど言及して挙げました日本からの訪問者でさえも、これを感じたに違いないのであります。ただ彼はそれにはっきりと指を置いてこうだと明確化することができなかったものであります。さらに、アメリカ合衆国の中には、ヨーロッパからきた人々の群、ならびにその文化というものが、非常に重きをなしております。しかし、ヨーロッパからではない人々、たとえばアジアからの人々の流れというものも、常にアメリカの生活の流れの中に新しい血を注入しつつあるのであります。

ところで、次のように主張することができそうです。アメリカの生活様式、生き方というものは、全くオープンであっ

て、そしていつも動いております。それは、行動しつつある多くのもの、あるいは要素が、動的に入りまじっているものであります。そのことは最初からいえるのでありまして、また、年がたつとともに、この現象はますます多様となりつつあるのであります。これがアメリカの生活というようなものを一つのシステムとして叙述することがなせむずかしいかという、その基本的な理由なのであります。たとえば、いろいろな概念、生活・自由・解放、それから幸福の追求というような概念も、つねにうつりかわっているのであります。アメリカは現在二百年祭を祝いつつありますけれども、アメリカ人は実際にはその厳密な意味において、彼らの歴史をふり返えてみることはできないのであります。現在というものが常に彼らの前にたちふさがっており、また未来というものがますます大きく、ますます呼びかけまねくものとしてうつるからであります。このことは決してアメリカ人が伝統をもっていないということではありません。たしかにそこには過去からの伝統があるのであります。しかしながら、生のダイナミックな混合のうちにあって、それを切り離して取り出すことは困難なのであります。あるいは、それを取り出し示して、それについて途方もなくセンシメンタルになるといふことも、今はむずかしいのであります。

今までよくいわれていたことでありますが、アメリカが哲学に寄与したのはプラグマティズムであると、そういわれております。

しかし私が個人として感ずるところによりますと、このプラグマティズムとか、あるいはプラグマティックということばは、いつも少しずつ改変された意味あいをもっているのであります。十九世紀のプラグマティズムと、二十世紀のプラグマティズムとは、同じ根から出てきたものではありませんけれども、両者は全く異っているのであります。前後の連関において知られる意味あいというものがいつもかわっているのであります。なぜかというところ、プラグマティックな状況というもののコンテクストは、非常にむずかしい構造をもっておりまして、これを定義したり、あるいはその中で働くことが非常にむずかしい、そういう仕組みなのであります。結局、アメリカの国というものは巨大な大陸でありまして、その中に人々がどんどん入ってきて、そうして、多年にわたって彼らのやったことが、現在アメリカとして成立しているものをつくりだしたのでございます。だから、アメリカ人がオープンであるということ、オープンネスと、それから、すべてを吸収するアブソープションという性質は、そこへつくり入れられた特質なのでございます。哲学の場面についてはこれだけの準備的な概観をいたしておきまして、次に今晚の中心の論題に移っていくことにいたしましょう。

先ず最初に、皆様のために、アジア哲学ならびに比較哲学にについての、組織的な、そして制度的な観点からの状況を、述べさせていただきます。

(1) 第一に、本来の哲学科というものは、もともとアジア哲学あるいは比較哲学を研究する普通の場合ではないのであります。もちろん、そこには若干の例外もございます。しかし、一般的にいつて、その大学の哲学科というものは比較哲学あるいはアジア哲学を研究する場ではないのであります。アジア哲学あるいは比較哲学の講座をもっている哲学科はごくわずかなのであります。その理由というものはいろいろございますが、その中でも次のものが特に重要だと思われまふ。

- (a) アメリカにおける哲学、あるいはアメリカにおける哲学の概念というものは、伝統的に昔から西洋哲学あるいはヨーロッパ哲学にのみ限られております。(どうも日本でもそのようですが)これは長い間にわたる偏見でありまして、実に長いこと存続したのであります。非常に長く存続したから、それを無くしたり、あるいは是正するということは、非常にむずかしいのであります。しかしながら、多くの西洋中心に考えている哲学者たちと私がいろいろ接触しましたところを通じて、私は個人的に感ずるのであります。彼らつまりアメリカの西洋中心に考える哲学者たちは、だんだんとオープンになってきております。そうして、徐々にではありますけれども、西洋以外の諸々の哲学を受け入れつつあります。しかし、こういう哲学者たちはまだ自分達自身の努力によってこの昔からの伝統を変えようとするのではないのであります。
- (b) こういうことを申しましたからといって、アジアの思想・

概念がアメリカ人の思想あるいは考えの中に浸透していないというわけではありません。そうではなくて、皆様も想いおこしていただけますように、初期のアメリカのトランセンデントリスト、例えばソローとかエマソンとかいうような人々は、アジアの思想をアメリカ人の生活、アメリカ人の生き方の中に導き入れて組み入れることに、非常に成功いたしました。もっとも、彼らの最初の努力というものは、他の人々によつては、彼らと同様に保持され取り上げられるということとはなされませんでしたけれども、しかしながら、彼らはアジアへの門戸をあけておいたことによつて、衝撃をのこしたのであります。こういうわけで、後には散発的にあります。とどきに、またその強度もいろいろでありますけれども、とにかくアジアへの旅というものが、また成果をとまなつてもどつてきたのであります。

(c) アメリカ人の間には、すでに一種の既成の概念があるのであります。つまり哲学思想というものの、論理学も含め形而上学や認識論にもなるようなそういう哲学思想は、西洋においてのみ孵化された、西洋においてのみはじめて育てられた、そして西洋において長い伝統をもっている、だから、東洋思想などあまりいじらない方がためになると、そういう具合に思うのであります。しかし、この議論は支持することはできません。非常に弱い議論であります。けれども、それにもかかわらず、アメリカでは多くの人の心の中にしっかりと根をおろしてつづいているのであります。

す。これはどうも思ひ上がった無知であります。どなたでもよくお気づきになるように、思ひ上がった無知であります。このような態度は、デモクラシーにおけるオープンネスと、それからアコモデーション、適応の精神に矛盾するものであります。私は考えるのでありますが、デモクラシーというものは、非常に柔軟なものであり、弾力性のあるものであります。しかし、それと同時に、デモクラシーは、良かれ悪しかれ、ありとあらゆる仕方で屈折させられ、変化させられうるものでもあります。

(d) 私は心してあなたがたにお知らせしなければなりません、アメリカの哲学者たちは、大体において、やはりアジアの思想に興味をもっているのであります。その興味をもっている人の人数の点で申しますと、私は考えますが、アジアに対する興味と、興味の強さというものは、どんどんではねるように増えて成長しつつあるのであります。特に一九四五年以来、非常に増大しているのであります。日本におけるのと同様に、第二次世界大戦のあとでは、新しいジュネレーションの学者たちが現われてきました。そして彼らは最近の二十年かそこらの間に、彼らの真に価値あるゆえんを実証しはじめたのであります。ここでの問題は、アジアの哲学的伝統に心を向けている立派な力ある学者たちが、アメリカ合衆国のあちこちの哲学科を通じて、ごくまばらに、ただまきちらされているだけであるということです。これらの学者のうちある人々は、哲学科にさえも属していないのであります。

す。ある学者たちは宗教の分野にあります。それから他の人々は、例えば言語学とか歴史とか古典学とか、あるいは文学というような学科の、いともさびしいメンバーとして存在しているのでございます。もしもアメリカ合衆国を通じて哲学科というものが、アジアの哲学に関して、われわれが望み欲したようには活動的でないのであるならば、では、どの学科、あるいは、アカデミックな世界のどの部門の人々が、この点に関して活動的でありましょうか。私は二つのアカデミックな部門を指摘することができます。

この二つの部門と哲学科の活動は、結局は、重なりあうものでありますけれども。以下、この点の議論を進めましょう。

(2) 宗教学科、あるいは宗教研究の学科が、いろいろな仕方、アジアの思想および伝統の研究に従事する活動という点では、哲学科にとってかわったのであります。この理由は、アジアの思想体系は、さきほど私が述べましたような西洋的な偏見に基づいていたため、その代償として、いろいろな点でアジア研究を宗教科の方へゆすりわたしてしまつたからであります。こういうわけで、東洋の宗教的伝統と西洋の宗教的伝統の間の密接なつながりというものが、かえって非常に早く確立されたのであります。そしてある意味では、この関係が、逆説的なことでありますけれども、西洋の哲学者に、東洋の体系を開拓しあるいは調査研究することをさまたげたのであります。もちろん、こういねばならないのであります。この関係というものが、アジアの思想体系をゆが

めてしまった明らかなケースがいくつかある、と。例えば、神秘的な面とか、精神的な面であるとか、あるいはトランセンデンタルな面であるとか、あるいは彼岸的・来世的な面などをあまりにも強調してきたなどが、それであります。

一番いい例は仏教であります。たしかに仏教の発展には宗教的な要素があります。しかし、仏教思想にはまた、しっかりとした確実な哲学的な基礎が存在するのであります。じっさい、私は、最初は仏教を宗教的な訓練修養法として研究しはじめながら、終りには取り扱いうる以上のもっと多くの問題をそこに見出した、アメリカの学者に、数多く出会っております。そこで、当然これらの学者たちは、徐々にではありますけれども、仏教思想の基礎、基本にもどって行つたのであります。その仏教思想の基礎なるものは、純粹に宗教的な志向からは遠く離れているものであります。結局、知識人あるいはインテリゲンチヤに対して仏教が最も永続的な力を及ぼすのは、その非有神論的な、そして超自然的ではない要素なのであります。仏教において浄土教をも理解・包容する深みというものは、私は確信するのでありますが、人間の自然の傾向・氣質の中に宿っており、外的な様相を人間に導き入れることなしにその人間の決意をかためるという中に宿っているのです。そこにおいては信仰でさえも人間の内に宿っている自然なる力なのであります。

そういうわけでありますから、しばしば起こりましたように、

キリスト教徒は容易に仏教徒となることができるのであります。しかし、他の仕方というものは起こらない。理性あるいは知性、それから経験というものが、哲学あるいは哲学的思索の二つの基礎であります。私は考えますが、信仰の仏教的タイプというのは、やはり、当然のことではありますが、理性と経験に属するのであります。もっとも、この可能性を探求しようとしないうちに見える学者、あるいはその関係をただ無視するだけの学者はおりますけれども。

ともかく、アメリカの国全体にわたって、宗教学科は、アジア研究と比較研究を促進してまいりました。そして、まことにおどろくべきことでありますが、若干のすぐれた書物を生み出したのでございます。

(3) 第二次世界大戦以来、アジアがアメリカ人に対し、また世界に対して、門戸を開きましたために、アジア研究に対する興味というものが、まるでもうむくむくと高まったのであります。その結果として、やがてアメリカ合衆国全体を通じて、アジア研究学科というものをつくるまでにいたりました。さらに他の学科、例えば、歴史・芸術・音楽・人類学・社会学・言語・政治学・文学、それから哲学をも含めまして、それらはみな、アジア研究のそれぞれの局面を含めるように拡大・膨張したのであります。

こういうわけで、アジア研究というものは、アカデミックスな世界では、もう何でもとり入れるプログラムになりました。それは

何でも含めるデパートでありまして、時にはどうもおとしめるような言葉で言及する人々もいるのでありますが、ありとあらゆるものを吸収するファッジ・ファクトリー (Fudge factory ファッジは砂糖・ミルク・バターで作ったチョコレート・ナット入りの柔らかいキャンデー) ともいわれます。たしかにそうであります。が、しかし、その名は何であらうとも、とにかく、アジアへの眼を開き、興味を増大するためには、われわれに対して大きな役割を果たしてくれたのであります。一九五〇年代のおわりにおきましては、アジア研究協会 (Association for Asian Studies) というものがつくられました。それは、アジア研究における途方もない大きな企画があって、それへ焦点を合わせなければならないという必要、それからまた、指導的な役割を果たさねばならないという必要に基づいて、つくられたのであります。このアジア研究協会とは、アメリカにおける最も大きな学問的な協会、最も大きな学会の一つとなりました。そうして幾年かたつうちに、多くの小さなあるいは特殊なタイプの学会がこのアジア研究協会に連繫することになりました。そのような学会の一つがアジア哲学・比較哲学会 (Society for Asian and Comparative Philosophy) でございます。一九六八年に創設されましたが、ただちにアジア研究協会に連絡をとりまして関係をもち、パネルに加わり、また毎年のビジネス・ミーティングに加わることになりました。そういうわけでありまして、アジア哲学・比較哲学会は、定期的にアジア研

究協会の年次大会といっしょに会を開きます。アジア研究協会の年次大会は、アメリカの主な大都市、例えばワシントン・D・C、フィラデルフィア、ニューヨーク、ボストン、シカゴ、ロサンゼルス、それからサンフランシスコ、そういうような大都市で交互に開かれることになっております。来年は、これは初めてであります。カナダのトロントで開かれることになりました。

年次大会のパネルは、通例四つあるのでありますが、それぞれの問題に向けられてつくられております。それらはワークショップ・セッション (Workshop Session) と呼ばれておりますが、

そのわけは、そこで論じられることが一時的な、あるいは仮定的なものに過ぎないかという——問題提起だからであります。

例えばそれぞれのワークショップは過去において次のようなテーマをもったのであります。東西における因果観、東西における時間と時間性、東西における自由と革命、それから言語と哲学の言語。来年トロントでは、多分、東西の懐疑論というテーマになるでございましょう。ふつう、それぞれのテーマをめぐって、いろいろな部会があります。中国、仏教、インド、それから比較という、それぞれの伝統についての部会が開かれるのであります。その討議は全く開放的でありまして、その会のメンバーも出てくるのであります。だが、また一般の聴衆も参加することがのであります。だが、主に力を入れるところは対話であります。それは東と西との対話だけではありません。そうではなくて、例えば東洋におけるいろ

いろんな伝統とか、思想体系、東洋にもいろいろあるわけですが、その間での対話、あるいは西洋にもいろいろの伝統や体系があるわけですが、その間での対話ということに力を入れているのであります。もちろん、これは容易にできることではありません。それは皆様お気づきのことでありましょう。このような対話をさらに進めるには時間が必要であるのに、それが十分でない、欠けているのであります。そういうわけで、問題はいくらか明らかにされ、あるいは説明されることにはなりますが、しかし、いつになっても究極的に解決されるということはないという状態であります。⁽¹⁾

アジア哲学、比較哲学という研究領域について学科が理想的にはいかにあるべきかという、それに最も近いものは、依然としてハワイ大学の哲学科であります。私がバッファローで現在の地位を得て活動する以前に、私はこの哲学科に約十年ほど勤めておりました。ハワイ大学の哲学科というものは、三つの伝統の学者たちを完全に集めて備えているのであります。すなわち、インド哲学・仏教哲学・中国哲学の伝統の学者たちがおります。しかも、それに加えて、厳密に西洋的な哲学の伝統の学者をもそこに集めていっしょにいるのでございます。皆様のうちには思い出される方々もあるでありましょうが、ハワイ大学は、故チャールズ・A・ムーア博士の有能な指導のもとに、一連の東西哲学会議を開催いたしました。それは一九三九年、四九年、五九年、六四年、六九年でございます。最後のものはミシガン大学のエイブラハム・

カプラン博士によって指導されました。しかし、最近、カプラン博士はイスラエルへ移住されました。この東西哲学会議というものは大体のところ、入門的なものであって、知識を与えというタイプのものであります。しかしながら、その会議は最初の目的をよく果たしたのであります。東西哲学会議の価値をはかり、あるいは評価するということは、今のところむずかしいのであります。しかし、私が考えますところでは、その最も大きな価値、意義の一つは、アジア哲学ならびに比較哲学に対して、大きな威信を与え、また研究の奨励をなしたということであります。その仕事はまだおわっておりません、故ムーア博士がよく言っておられましたように。

一九六九年以来、以上のような大規模な哲学会議というものは、もう開かれませんでした。以前の哲学会議の場合には、そのたびごとに、アジアと、それからアメリカヨーロッパから、約百人ほどの学者がやってきて参加したのであります。ところが、今やそのかわりに、ハワイ大学はもっと小規模の年次学会を開いているのであります。その年次大会では、それぞれ、約十人かあるいは十二人くらいの学者を、何か非常に特殊な限定されたトピックなりテーマを選んで、招聘いたしております。例えば、次のようなテーマがこれまで選ばれております。美学、論理学、実存主義、それから昨年は「大乘仏教とホワイトヘッド」というのがテーマでございました。⁽²⁾

この小規模の会議ということについては、これくらいにしておきますが、そのまゝに次のことを言っておきたいと思います。私たちのアジア哲学・比較哲学会というものは、今やアメリカ哲学会 (American Philosophical Association) の地域ごとの集会の中に入っている場所を占めたのであります。アメリカ哲学会というものは、三つに分かたれております。東の部会と西の部会とそれから太平洋部会であります。部会の大きさと活動の規模は、ちょうどこの順になっております。しかし、いずれか一つの部会のメンバーは、これら三つの部会のどれにでも属することができ、これは三つの部会のそれぞれの活動に参加しようと思えば参加できるようになっております。そこで、私たちの学会は、アメリカ哲学会の三つの部会のうちのそれぞれにおいて、パネルを要求、委嘱いたしました。そうして私たちの学会のこと、あるいはその仕事を一般的に知らせるばかりでなく、さらに、東と西にまたがるような問題について対話を積極的に行なうために、そういう依頼をなしたのであります。過去におきまして、私たちは、サルトル、実存主義、マルクシズム、毛沢東の思想などについてパネルをもちました。私たちはいつも、いわゆる純粋西洋哲学の思想家たちが対話に参加するように招く配慮をおこたりませんでした。例えば約二年ほど前に、私たちの学会は、アメリカ哲学会のパネルでミルトン・ムニッツ教授の論文、「存在ないし世界の概念」(The Concept of Existence or the World) に論議を集中させ

たのであります。ムニッツ教授は非常によく知られたアメリカの形而上学者であります。私たちはいつものように、インド哲学の分野、中国哲学の分野、そして仏教哲学の分野からそれぞれコメントを得たのであります。私自身は仏教側から批評するという立場をとり、ムニッツ教授をして仏教の見解に接近させようと努めたのであります。しかしながら、結局のところ、ムニッツ教授は、両者の間になんらかの相関関係を見出すほどの柔軟性がありませんでした。同教授は、その門戸を開いて、さらに対話を続けていこうと欲しなかったのであります。けれども、ムニッツ教授に会えたのはまことに幸せなことでありました。そうしてまた、非常につよい昔からの偏見をもっているにもかかわらず、なおこの対話に参加しようと望んでいる、厳密に西洋的な思想家がいるということを知ったのは、幸せでございました。

今年、アメリカ哲学会のパネル・ディスカッションの中心の論題は、「東と西における死と死ぬこと」についてであります。お気づきのように、このテーマは非常に実際的で、また現代的であります。それは哲学的な問題である以上のものとなるであります。私の理解するところでは、参加者は他の分野からもやってこられます。例えば、心理学とか医学とか社会学とか、そういうような分野からも参加者がおります。それは非常に面白い対話になるに違いないのであります。

故チャールズ・ムーア博士が指導しました東西哲学者会議に続

いて、ただ一つ、アメリカに対してもっとも影響の大きかった方は、鈴木大拙博士の仕事であります。日本および仏教という立場から見ますと、禪が導入され、結局、最終的に受け入れられたというのを、もし私が今ここで言わないならば、私は大変な見過しをしたことになるではありません。いうまでもなく、アメリカにおける私どもを含めて多くの人々にとって、また日本においても、あるいは世界全体を通じてもいえることでありますが、禪は、実際、鈴木と同義語であります。禪といえは鈴木のことではありません。もちろん鈴木をゆがめた人々はいつもおりました。かれらはこのタイプの教えを鈴木禪と呼んだのであります。それはともあれ、私はこう言わねばなりません、私自身は個人的にこの人によって、またこの人の業績・人格によって、非常に影響されたのであります。私はまた、この会場におられる他の方々も、やはり同じように影響を受けたということを知っております。著作や講演、それに個人的な接触において、鈴木博士のなした貢献というものは測り知れぬものがあります。鈴木博士がノーベル賞を受けなかったということは、まことに不幸なことだったと思います。とくに、鈴木博士よりもっと劣った人物が、博士が亡くなった一九六六年以来、次々とノーベル賞を受けたという事実を考えて見ますと、鈴木博士がノーベル賞を受けなかったことは、残念なことでもあります。

アメリカだけにおきましても、とくに第二次世界大戦以後、鈴

木博士は、東洋の岸辺への、東洋の豊かな文化的伝統への道を照らす光として、はっきりと屹立しているのであります。博士は最初、一八九三年にアメリカに来て、それからちずっと約十年ほどアメリカにおられました。一九四九年ふたたびアメリカに來られ、最初はハワイに、それからカリフォルニア、最後にはニューヨークで、コロンビア大学で講演をされ、あるいは個人的にも講演をされ、そうして、アメリカの場面に消すことのできない影響・衝撃を残したのであります。二十五年前に鈴木博士にはじめて会ってその話を聞いた、その知識人たちの最初のグループの中から、若干の優れた学者と禪徒 (Zenists) が現われました。多くの白人の老師、例えばハワイにいるエッケンさん (Allen)、ロチェスターにおられるカプローさん (Kaplan) とか、そういうような人々が、実際の禪の伝統を継続しているのであります。もちろん、そのほかのほんとうに日本の老師方もいらっしゃいまして、禪を広めてくださっているわけです。こういう方々はいまなお渡米してまいります。

禪は、一九四五年から一九六五年の期間において、押し寄せる東洋文化の波の最大のものであったことを認めなければならぬと思います。哲学者・宗教家・作家・詩人・音楽家・芸術家、そのほか大勢の知識人が、禪というものに曝されて、そして禪を受け入れたのであります。私の見るところでは、これは、東洋の意識という点でアメリカに起った、はなはだおどろくべき、また貴

重なる出来事であると思ふのであります。

今日、アメリカ全体、そのすみずみにいたるまで、禅はいか
わらずおそろしく強い力となっております。いかなるアメリカの
地域におきましても、北でも南でも、東でも西でも、禅のセンタ
ーができております。あるいは禅を研究する人々のグループが栄
えております。そこには、修行を積んだ老師方あるいは教師の方
々がおられるのです。学問的な機関においても、禅は研究の正規
のコースの一つとなっております、もっとも、実際面というものは
必ずしも分り易い形では教えられておりませんけれども。

こういうわけで、要するに、禅がアメリカにたいして、また全
世界にたいしてなした、最も大きな貢献の一つは、大きなスケール
で、アジアの思想体系の、実に不可思議、偉大なる宗教的・哲
学的な見識というものに、道を開いたことである、といわなければ
なりません。禅ははじめ、多くのエキゾチックなものと同様に、
人々のあいだに通俗的なみで流行したのですが、ひとたびアメリ
カ人が禅をみずから実証してみますと、もはや元へ戻ることも
できませんでしたし、無視することもできなかったのであります。
実際禅を味わい、実証したその副産物として、アメリカ人は、他
のアジアの諸思想あるいは諸体系を開拓し、試してみるといふこ
とを始めたのであります。

では、これらの思想体系としては、どのようなものがありまし
ょうか。

(1) アメリカ人は易经を研究しました。いうまでもなく、特に
カール・ユングが易经研究にさいして大いに役割を果たしたので
あります。彼はそれを禅と結びつけて、そうして彼の集団的無意
識(Collective Unconscious)の観念に関係づけたのであります。
多くのアメリカ人は今なおこの分野に興味をもっております。

(2) 禅の研究は必ず道教の研究へと導いていったのであります。
アメリカ人は自然主義の観念、無為の観念に非常に魅惑されたの
であります。無為すなわちノン・アクションであり、何もしない、
あるいは、なんら不自然なことはないというこの観念は、自由で
安楽な生活というように、彼らによって広げて解釈されたのであ
ります。

(3) チベット仏教も新しい興味をもって迎えられました。多分、
最初は、麻薬みたいなものに夢中になったあの慣習と結びついて
いたのでありましょう。それで特に若者を魅惑したのであります。
しかしながら、その魅惑というものの、今日はかなり鎮ましまし
た。そしてそのかわりに、正統なチベット生まれの教師たちにと
ってかわられたのであります。このチベット人のラマたちは、瞑
想の道を開きました。そしてアメリカのあちこちに研究センター
をつくりました。例えばカルフォルニア大学のバークレー・キャ
ンパスにはニンマ研究所(Nyingma Institute)というのがあり
ます。そこでは、瞑想、座禅がタルタントルク・リンポチェとい
うラマ僧によって指導されております。このラマ僧は、インドか

ら来たのでありますが、しかし、以前には現在のグライラマといっしょにチベットから脱出してインドへ来た人なのであります。この研究所では瞑想の実習についてのいろいろなコースがあります。その他、チベットの心理学・哲学・言語・歴史・文化についての講義を開いております。さらに、M・A（文学修士）、ph・D（文学博士）の学位までも授けるのであります。しかしまた、そのような学位をとらない研究だけのプログラムもあるのです。ゴヴィンダ（Govinda）とか、ガンサー（Guenther）というような有名な学者が時々招かれまして、仏教のいろいろな面について講義をしております。この研究所は非常にすばらしい仕事をしていると私は考えます。

(4) アジアの思想のうちで、他の、目下関係のある体系、たいそう力があり信者を得ている体系というものは、トランセンデンタル・メディテーションのグループ（Transcendental Meditation Group）であります。このグループの出発はおかったのであります。しかし、著名な人々や知識人がそれに参加しているので、全く正当なものとみられております。インドの師匠であるマハリシ（Maharishi）という人が時々アメリカへ来まして、瞑想を教えもしますし、またその運動を促進させてもおります。こんにち、科学者・心理学者・医者、こういうような人々が、その研究と実習に従事しております。例えて申しますならば、数年前の禅に対する興味のようなものです。そのさいには、心理学者たちが、禅

を実習する人々のボディ・ケミストリーの研究に入っていきましたし、またパラサイコロジ（超心理学）の分野へも入っていきましました。ちょうどそういうときのことを思わせるのであります。いつも活動していていつも忙しい大部分のアメリカ人にとっては、トランセンデンタル・メディテーションなるものは全く歓迎される事柄であるようにみえます。この影響は続くであります。そうしてアメリカの場面に広範囲にわたるしるしを残すことでありましょう。⁽³⁾

以上におきまして私は、アメリカ合衆国におけるアジア哲学および比較哲学の状況について、皆様にごくあらましをお伝えしたのであります。しかし最後に、アジア哲学および比較哲学が今後未来にわたっていかなる方面に進んでいくことを期待し、またいかなる方面に進んでいくように導いていけるかということを示し上げないならば、私は務めを果さないことになりましょう。私は予言者ではありません。しかしながら、少なくとも、多年にわたってこの分野を見て経験してきた者という利点に立って、私は今後の展望として望ましいことをいくつかここに挙げておきたいのであります。

(1) インド哲学・仏教哲学・中国哲学・日本思想というようなアジア哲学は、実質に關してもまたその説明・解明においても、西洋の伝統に追いついております。これが意味することは、東洋哲学も西洋哲学も、同じ理解のレベルで、いくらか似たような仕

方で扱うことができるようになったということです。東洋は精神的であるとか、オリエントは測りがたいものであるとか、そういうような好んでなされるつまらない誤解によって、私たちは何も妨げられようとは思いません。あらゆる哲学上の道具、方法論・言語・言語分析・論理など、こういうようなあらゆる哲学上の道具が、同じように容易に、かつ力強く、東洋と西洋のどちらの方向からも使われるようにならねばなりません。いずれか一方の哲学あるいは伝統について、だまっていたり、あるいは弁解がましく弁護論的になる必要はないのであります。

(2) それぞれの文化的伝統は、いろいろの面をもっている現象という点から、各自の立場を、まずはっきりさせなければなりません。すなわち、いかなる一つの思想あるいは教説というものも、いずれか一つの学問のただ唯一の領域の中に閉じ込められておってはなりません。それぞれの思想は、いくつかのいろいろな分野の合した統合体の中で考量され、吟味されなければならないのであります。例えば、カルナー (Karl Jaspers) というような仏教の思想も、例えば社会学・生理学・心理学・歴史など、いろいろな学問分野から検討され、解釈されて、宗教的また哲学的な次元での評価をふやし、支持するようにすべきなのであります。

(3) 以上に述べましたようないろいろな学問にわたって概念を解釈するという場合には、その意味がいくぶん改変されるであろうということは不可避であります。しかしながら実は、そのよう

な改変が起るということは、過去のいろいろ異った文明の伝統において起ったことではありませんか。時代が違えば、おのずから違った解釈も必要となったのであります。そうしてこのことがまたその社会自体を發展させ、社会意識あるいは社会的なパターンにおける変化をつくり出したのであります。仏教の教えというのはまさにこれに適合している良い例であります。仏教の教説というものは、一つの国から他の国へ移るときに、変化し、また改変されます。しかしその根本の観念というのは、同じであつたようであります。すなわち、仏教の教説は、いろいろに異つた文化あるいは種々異つた国々において認められるのであります。そこで今や学問と理解というものは、人間の出来事、人間の意図あるいは背景、そういう広い範囲にわたつての事柄を焦点のうちにもたらすことによって、もっと現代的な、また実際的なアプローチをなさねばならぬのであります。たとえば、宗教の研究は次のような三つの領域に集中してきました。

- (a) 諸宗教の歴史の研究——一つの思想体系を生み出した歴史的伝統の研究、あらゆる宗教の古典的研究。
- (b) 諸宗教の現象の研究——この領域では、シンボル・神話・解釈学が中心問題となりましょう。また、分析的・言語的・論理的アプローチが用いられるのであります。
- (c) 諸宗教の比較研究——これは、いろいろな学問分野からアプローチすることによって宗教を解明することであり、人間

科学およびそれ以外の諸科学の中の、すべての同種類の領域が、解明にさいしてひとしく取扱われ、用いられなければならない。

アジア哲学と比較哲学は、右のような三つ又のアプローチによって形成されねばならないということが、認められるべきであると思います。すなわち、歴史と現象と比較研究（歴史的研究と現象論的研究と比較研究）であります。哲学者たちというのは狭くあることはできません。また哲学者たちは一人はなれて孤独でいるというわけにもいきません。かれらは、あらゆる個人の毎日の生活の中に巻込まれていなければならないのであります。これは現代の要請するところであります。

私は考えるのであります。アジアの思想家としてまた比較思想家としてわれわれは、態度が広く、かつ柔軟であって、特殊な限られた事柄、問題について対話をなすばかりではなく、あらゆる事物の全体の性格について、広い視野をもって研究しなければならぬと感ずるのであります。

さて、柔軟性と弾力性がよくまれたとして、東と西の対話において、われわれはどういうことを期待できるでしょうか。われわれはいつたい日本人として何を世界に提供することができるでしょうか。私は考えるのでありますが、例えば、日本が提供する非常に基本的な、また偉大なものがなにかある、そう思われるのであります。われわれはいろいろな要素に接しているのであり

ますが、その要素を取り入れて、それを洗練させ、あるいは最後に立派なものとして磨きをかけるという、そういう性格、特徴があることに、私は言及したのであります。日本は、日本の岸辺にはいつてきて、中へ侵入した多くの観念に、いかに立派に最後の磨きをかけたかということで、皆様は驚かれるでありません。最近百年間の外国文化の侵入というものは、物質的な事柄についても、あるいは非物質的な、精神的な事柄という点におきましても、非常な勢いをもってやってきたのであります。しかし、それについて日本が何をしたか、以前に日本は、儒教・道教・中国仏教にたいして、今は西洋から入ってきたテクノロジーと科学というものにたいして、日本が何をしたかということを、ごらんいただきたい。その結果として現われ出た文化は、何かしらエレガントな、優美な、そして独自のものを作り出して、示してきたのであります。この点について私はくどくど言う必要はないであります。しかしながら、今、世界の諸国民はますますおたがいに近づきつつあります。そこで地球全体にわたって発展をはかり、良きものを養うために、東と西のもっとも良い要素を取り上げていくような、そういう活動を、われわれはここで開始する必要があります。それはどうも、あまりもってまわったやり方だと、だれか言われるかもしれません。しかしながら、それは決して遠回りではなくて、着実に、徐々にではあります。事物の真の本性を実現させていくところのものであります。

洗練することへの道、磨くための道、それは物質的にも、あるいは精神的にも、どちらでもいえるのでありますが、それは実際、人間が将来、その本性として歩むべき道なのであります。われわれは真似をする必要はない、もしただ真似をしたりなどしたら、それは心ない、おろかな考えに墮してしまふのでありましょう。われわれが必要とするところのものは、東と西の両方からするダイナミックな、活動的な価値の具現であります。それによってわれわれはますます、粗野で磨きのかかっているものから、洗練された優美なものへと移っていくことができるであります。まさにこの点におきまして、私たちは完全な協力者の関係を実現するべく、共働しなければならぬのであります。

(1) アジア哲学・比較哲学関係の刊行物としては、次のようなものが挙げられます。

- 「インド哲学」誌 The Journal of Indian Philosophy, Reidel.
「中国哲学」誌 The Journal of Chinese Philosophy, Reidel.
「アジア研究」誌 Journal of Asian Studies, Michigan-Chicago.
「オリエンタル研究」誌 Journal of the American Oriental Studies, Yale.
「宗教アカデミー」誌 Journal of the American Academy of Religion, University of Montana.
「東西哲学」誌 The Journal of Philosophy East and West, University of Hawaii.

(2) その他の例を挙げますと、私のいるニューヨーク大学バッファロー・キャンパスで、美学にかんする東と西の対話を、昨年（一九四九

年）の春、開催しました。これには三五名ほどの参加者がありました。カナダのブロック大学では、「二つの真理」、とりわけ仏教とヴェーダ・インド哲学をめぐって、特別集会を開きました。この紀要は昨年刊行されております。スプリング編 (G. M. C. Sprung), ライデル刊 (Reidel)。エール大学では、数年前、中国哲学のシンポジウムをおこない、コロンビア大学の研究グループも、朱子学と王陽明についてのシンポジウムを主催いたしました。ハワイ大学は、明年（一九五一年）の夏、中国の古典哲学と現代哲学のシンポジウムを開くときいております。

(3) ここでなお、アメリカにおける創価学会の活動と、H・チョードワリ (Haridas Chaudhuri) が一九五五年に創設したアジア研究所 (Institute of Asian Studies) におけるオーロロインドの統合哲学の研究を挙げるべきであります。

筆者紹介

稲田ケネース (Kenneth K. Inada)

ニューヨーク (バッファロー) 州立大学教授、

仏教哲学・比較哲学専攻、

附記

稲田教授の講演原稿は、講演のさい時間の関係で、数箇所割愛して読まれた。この翻訳では、それらの一部は本文中に復元し、他は註の形で要約して示した。